



地域医療を再生させる会 ニュース

第6回 旭行動 来院患者さん1300枚

12月18日（火）13時より、第6回「旭行動」に取り組み、松本会長はじめ医労連、JMIU、千葉県争議団、建交労から16名が参加し、正面玄関付近で来院の患者さんにピラを手渡し、「不当解雇処分を受けた宮本さんを職場に戻してください」「職員や患者さん、地域住民の声を受け止める旭中央病院に再生しましょう」と訴え、宣伝隊と患者さんがそちこちで対話をする光景が見られました。ピラは、1時間の宣伝で約700枚を手渡しました。

職員は顔も見せず 警備員に丸投げ

宣伝隊は、13時過ぎに旭中央病院玄関前付近で、患者さんやその御家族に対しピラを手渡す宣伝行動を展開しました。

ピラまき行動に対し、委託会社の警備員から「敷地内でのピラまきは止めて下さい」との声がかかりましたが、「直接、責任ある職員から話が必要」と対応し、その後、職員は顔も見せずに一切の干渉をしてくれませんでした。

これまで執拗に干渉を繰り返してきた病院側も、失態を積み返



重ね、先月から一切の機能を停止しました。

患者さんと対話

宣伝隊に「何があったんですか？」等と話しかけてくる患者さんや御家族も多く、宣伝隊と多くの対話が生まりました。

ある患者さんとは、**宣伝隊**「旭中央病院、地域医療を良くしていくために行動しています」**患者さん**「こんなことが起こっているとは知りませんでした。教えてくれませんか」

「ありがとうございます」**宣伝隊**「不当解雇撤回に向けて多くの人に知らせてほしい。それが地域医療を守ることに繋がります」

患者さん「わかりました。私も患者なので病院に物を言うのは気が引けますが、地域の人に伝えます。この病院がなくなってしまうので、そのためにもこういう問題は早く



解決したほうがいい」と励まされました。

また、ある御家族は「家族が入院している。ICUから一般病棟に移るときに『1日1万円の差額ベッドしか空いていない』と言われた。年金生活で、どうしたらいいのか」との切実な訴えもありました。すでに、「すべては患者のために」という姿勢から、変質を始めている実態が垣間見れました。

地域住民や患者さんの医療要求に応える公立病院として存続・発展させていくためには、職員を大切に、地域住民の声に耳を傾ける病院運営を確立していかなければならない、そのことを改めて痛感する宣伝行動になりました。

旭中央病院検討委員会 実態は「独法化」推進委員会

何が良くなるのか不明なまま「独法化」が既定路線の異常

第2回旭中央病院検討委員会

第6回旭行動参加者は、同日に開かれた「第2回旭中央病院検討委員会」を傍聴しました。

検討委員会は、「地域において旭中央病院が果たすべき役割」「課題と対策」等を検討するということになっていますが、実際に傍聴してみると『独立行政法人化推進委員会』と言える内容でした。

委員の一人であり、国の公的病院潰しの方針『公的病院改革ガイドライン』作成責任者の長隆氏が声高に「独法化」を主張するという異常な内容でした。

しかも、①現在の課題（医師不足等）が、

独法化によってどうして改善するのか、②経営状況から考えても、どうして「経営効率優先」の独法化にしなければならないのか、全く不明のまま「とにかく独法化すればいい」という恫喝に等しい姿勢です。

長隆氏は、全国の独法化となった病院からのアンケートを集約させ、それを高く評価し、「独法化推進路線」を更に打ち出しました。しかし、肝心の職員や患者さん、地域住民の意見が全く反映されていない内容に、会場から「職員・患者の意見が反映されてない一面的なものだ」「これは独法化委員会か」と、怒りの声があがりました。

旭中央病院の嘱託医で、同時に旭市議会議員の大塚ゆうじ氏は自身のブログなどで、

長氏らを「医療の専門家」等と天まで持ち上げ、「こうした医療の専門家主体で」病院運営をしていくことが望ましい等と書き込んでいますが、長氏は「医療の専門家」ではなく、単なる「公的病院・地域医療潰しの専門家」なだけです。

住民や職員の声を蔑にしながら、「経営効率」と「国の意向」だけでしか判断しない人物と、それに擦り寄り結託している市議会議員に、県民・住民の命と健康の砦である公的病院を勝手にさせるわけにはいきません。

引き続き、住民や患者さんに訴えながら、地域医療を守る砦としての病院を守り抜きます。